第２２回川崎市文化芸術振興会議会議録（摘録）

１　会議名　　川崎市文化芸術振興会議

２　日　時　　平成２２年６月３０日（水）
　　午前１０時から１２時まで

３　場　所　　第４庁舎４階　第５会議室

４　出席者
（１）　委　員　　澤井委員（会長）、垣内委員（副会長）、岩森委員、城谷委員、
　　野畑委員、林委員、渡辺委員
　　欠席委員：廣瀬委員、星川委員、前田委員

（２）　事務局　　市民・こども局市民文化室
　　野本室長、村石担当課長、服部課長補佐、植村職員
　　浜田担当部長（文化活動支援）

５　議　題
（１）　平成２２年度文化アセスメント対象事業の概要について
（２）　平成２１年度文化アセスメントの結果について
（３）　今後のスケジュールについて

６　公開・非公開の別　　公開

７　傍聴者　　０名

【審議内容】

事務局　　会議は、川崎市文化芸術振興会議規則（以下「振興会議規則」という。）第４条第２項の規定に基づき、半数以上の委員の出席により成立している。配布資料について、議題資料２、３及び参考資料１、２については事前に送付済みであり、新たに議題資料１及び議題資料２の差替えを配布した。振興会議規則第４条第１項の規定により、澤井会長に議長として議事進行をお願いしたい。

議　長　　第２２回川崎市文化芸術振興会議（以下「振興会議」という。）を開会する。まず、平成２２年度文化アセスメント対象事業の概要について、事務局から説明をお願いしたい。

事務局　　昨年度末に選定した平成２２年度文化アセスメント対象事業は「アートのまちづくり事業」と「地域文化のまちづくり推進事業」であり、４月から５月にかけて「アートのまちづくり事業」の取組である「川崎・しんゆり芸術祭（アルテリッカしんゆり）２０１０」の実地調査を行った。事業の主旨や目的、概要について、事業担当課である市民文化室文化活動支援担当部長から説明する。

担当部長　　議題資料１は、第１回の川崎・しんゆり芸術祭の実施前、２００８年秋にこのようなイベントを行うことを発表したときの資料であり、開催主旨や概要を記載している。麻生区の新百合ヶ丘駅周辺を中心に総合芸術祭という形でオペラから今年は落語までの内容で開催された。開催の背景には、平成１９年４月に昭和音大が移転開校し、同年１０月には川崎市アートセンターがオープンするなど、文化芸術的な教育機関や施設が新百合ヶ丘駅周辺エリアに集積し始めたことがあった。もともと地域に文化に造詣の深い方が住み、映画学校や公のホールなどがある。地域として施設や人材を活用して芸術的なイベントが出来ないか、という動きが平成１９年をひとつのきっかけに一気に盛り上がった。準備会が平成２０年３月末に立ち上がり、平成２０年７月に有志が集まって実行委員会を立ち上げた。構成員としては、委員長に日本映画学校長、副委員長に昭和音楽大学理事長や小田急電鉄株式会社副社長、特別参与に劇作家を迎えるなど、地域の方々、町会、学校関係者、さらには経済界のトップと幅広い方々が委員になっている。新百合ヶ丘には９つのホールがあり、芸術系・教育系の施設の機能をフルに使ったイベントを通じてまち全体の活力にして地域と連動していきたい、と企画した。川崎・しんゆり芸術祭という名称では硬さがあるため、実行委員会の若手メンバーがイタリア語で「豊かな芸術」という意味の造語である「アルテリッカしんゆり」という愛称を作った。第１回は平成２１年４月２４日から５月１０日まで開催し、約２万人が集まった。なお、公演は実行委員会だけでなく教育機関や施設もそれぞれ主催し、総体としてアルテリッカしんゆりとなっている。２回目となる今年度は４月２４日から５月９日まで１６日間開催し、３３演目４５公演を行って入場者数は約２１，７００人、内訳はホールが約１３，１００人、ホール以外が約８，６００人という結果になった。昨年度に比べて約１，０００人増加すると同時に、今年度は新たに演芸部門を取り入れたことにより、より幅広い層に参加してもらうことができた。昭和音楽大学での国府弘子さんのコンサートや麻生市民館での劇団民藝の演劇などは特に好評だった。関連イベントとしてプレ美術展やアート市、子供広場なども実施した。また、このようなイベントは作る側、演じる側、見る側、この相互作用によって質的にも高まり、さらに広がりをもてるのではないかということで、今年の１月から３月に昭和音楽大学と日本映画学校の協力により、見る側として様々な分野の芸術などの見ていただくポイントなどを解説する講座を川崎市文化財団が実施し、約５０人が集まった。受講者にアルテリッカしんゆりに協力を呼びかけたところ、２７人が登録して延べ３６０人が市民ボランティアとしてアルテリッカしんゆりに協力した。初回なのでチラシを配ったり、会場を案内したりという部分だったが、市民ボランティアの活躍が今回は大きかった。既に来年度アルテリッカ２０１１に向けて企画が始まっており、更にボランティアの拡充を図るための準備も始まっている。今後、市民の力を借りながら地域でイベントを作っていく形を定着させていくことによって、このイベントが単発ではなく地域に根づいていく。この動きは市が進める「アートのまちづくり」という行政施策、市民が中心となってそれぞれの地域で芸術的な営みを展開していくという方向性と合っており、文化財団と連携しながら可能な範囲で支援し続けたいと考えている。

垣内委員　　市の予算はどれくらいか。

担当部長　　市は１５００万円を川崎市文化財団に補助金として支出し、川崎市文化財団が実行委員会への分担金という形で支出した。実行委員会ではこの１５００万円を主に広報とアルバイトなどの事務局費に使っており、実行委員会予算は約４３００万円である。

岩森委員　　公演の内容は非常によい。ただ、駅前が工事中だったことが残念であり、駅前の総合案内所ももう少し目立つものだとよかった。今回のイベントによって、経済効果がどのくらいであったかにより、まちづくりの一つの大きな切り口となるため、資料を集めてほしい。

林委員　　狂言の公演を見たが、大人向けのプログラムで観客は高齢者が目立った。新百合ヶ丘駅周辺自体は若い世代が多いと思うが、観客の年代層はどうか。

担当部長　　アンケートの集計結果では、４０歳代以上が中心で、最も多いのは６０歳代。若年層にこのようなイベントに来てもらうのは困難だが、今回はテレビでも活躍する若い芸人の漫才も取り入れたところ、満席になった。また、フュージョン系のロックバンドの公演にも若い人が多く来ていた。ただ一般的にあのエリアに住んでいて関心のあるのは中高年層が多い。

林委員　　若い人に関心を持ってもらえるプログラムにする必要があり、狂言でも、若い人も来たいと思う工夫が必要。

担当部長　　若い世代を芸術にどうやって惹きつけていくのかが大きな課題である。親子連れで鑑賞できるものをいくつか含めている。

林委員　　この芸術祭は様々なタイプのものを入れることができ、若い世代をターゲットにしていくのもよい。

岩森委員　　「リアル感電」という公演では、２０代・３０代のアート系の若者が多く、待ち時間も熱心にパンフレットを読んでいた。

担当部長　　収支の問題もあり、ある程度の席数の会場で観客が多く入る公演を考えなければならない。都内の小さな劇場で観客を集めているような公演を新百合ヶ丘に持ってきたとしても、適切な施設がなく、また地元の若者というよりも、東京の観客が来るだけになる可能性が高い。

澤井委員　　演目ごとに入場者の年代データはとっているのか。

担当部長　　アンケートは演目ごとに回収し、入場者の年代も集計している。

野畑委員　　約２０年前に立ち上がった新百合ヶ丘を中心とした芸術のまちづくりの委員を務め、川崎市アートセンターの計画や「芸術のまち」を広報するためのイベント等を行っていた。当時から日本映画学校などによる市民のボランティアが活躍していた。

議　長　　アルテリッカしんゆりについては、今年の文化アセスメント対象事業であるので、今後、議論を積み重ねていきたい。次に、６月８日に開催した第１０回振興会議部会について報告する。評価報告書のまとめ方について審議し、事業担当課と委員から出された資料や意見を評価項目ごとに整理することとした。議題資料２が整理したものであるが、完成形ではなく、本日の会議で再度議論したい。事務局から説明をお願いする。

事務局　　議題資料２について説明する。文化アセスメント結果報告書については、文化

アセスメントのマニュアルがあり、毎年度報告するものであるため、前書き、対象事業と選定理由、評価結果という形式で作成した。公表スケジュールについては、振興会議から評価報告書を市長へ提出し、市長が評価報告書に基づいて８月中に公表することを文化アセスメントのマニュアルで定めている。公表方法については、各区の行政コーナーなどへの配布及び市ホームページを予定している。公表の際は、文化アセスメントのマニュアルが参照できるように考えている。

議　長　　８月中に公表を予定しており、最終報告書を作成する。

垣内委員　　８月に公表することによって次年度の計画や予算を考える参考資料として使えることになる。

事務局　　対象事業の事業概要・目的と評価結果を公表する。

議　長　　報告書案の内容について事務局から説明をお願いしたい。

事務局　　報告書案の評価結果については、事業担当課の評価及び委員からの意見を集約し、文化アセスメントのマニュアル上の事業の目的、文化芸術性、市民とのかかわり、効率・効果という４つの視点で整理し、調査・評価シートの総合評価シートの項目に沿って各実施グループ長がまとめた。

議　長　　評価の内容について、各実施グループ長から補足説明をお願いしたい。

垣内委員　　Ａ「音楽文化振興事業」について、評価は委員の生の意見を集約・整理したものであり、確認やすり合わせを行う必要がある。また、提言には事業のパッケージングについても含める必要がある。

林委員　　Ｂ「市民文化活動支援事業」について、かわさき市美術展への意見が多く、改善に向けた提言ができるとよい。また、Ａ・Ｂ事業で文量や書き方などを統一する必要がある。

議　長　　原案は各委員の意見を尊重して作られているが、事実の確認、会議内の合意、Ａ・Ｂ事業間の文章の統一が必要である。

林委員　　評価の点数については、委員により差が大きく、議論が必要。

議　長　　最終的に中庸化する必要がある。また、取組の集合体であるＡ・Ｂ事業が振興計画上の位置づけからみて適当かどうかの評価や、取組の組合せについて提言してよい。

渡辺委員　　よくまとまっているが、どのように提言するかが難しい。言いっぱなしはよくない。

澤井委員　　文化アセスメントは基本的に文化芸術に関わる事業を拡大、展開してもらいたいという方向性をもっている。例えばＡ－３「坂本九の顕彰」については、工夫を求める意見が多く、Ａ「音楽文化振興事業」の中で継続すべきなのか、顕彰事業として再構築するべきか、提言の方向性について議論が必要。市民の受け止め方も考える必要がある。

岩森委員　　文化芸術を振興しようという評価にしたい。坂本九の顕彰についても、見直す提案は必要だが、それにとどめておくべき。

澤井委員　　提言も断定的にするのではなく、「こういう考え方もある」という表現や、意見が２つあるような場合は選択を市に任せるという方法もある。

岩森委員　　Ｂ－１「かわさき市美術展」は、出品者を広く募るために市民ミュージアムと連携し、周知を工夫する必要がある。

渡辺委員　ヨーロッパのコンクールでは、出品者の国籍も問わないケースが多い。日本の地方の展覧会は住民に限定している場合が多いが、出品要件を広げないと出品者が減ってしまう。

林委員　かわさき市美術展の目的が明確でなく、現在は登竜門としての要素がなく、市民の作品発表の場にとどまっている。

渡辺委員　登竜門では、楽しみに描いている市民の人たちの出品する場所がなくなる。市民の中からよい作家もうまれることもあり、区別する必要はない。

林委員　ジャンルの問題もある。

澤井委員　提言に、学芸員が作品の審査に加わる、または、学芸員が賞を出して受賞作品を市民ミュージアムに展示する、とある。

渡辺委員　学芸員が審査に加わるのはよい。美術館で実施する以上、学芸員が一人は加わることが必要である。

城谷委員　登竜門とは別に、市民参加はとても大事である。シニア世代でも一生懸命絵を描き始めた人がいて、誰でも参加できることは意味がある。提言としては、目的を絞ったらどうかという書き方がよい。

林委員　出品者が高齢化・固定化していく中で、若年層や新規参加者を取り込むために魅力的な美術展にすることが課題である。

渡辺委員　部門も工夫はしている。市民ミュージアムで開催したことは非常に大きかった。

垣内委員　受賞者は美術館で自分の作品を展示することが出来るのか。

渡辺委員　最優秀作品は、市民ミュージアムで１年間展示し、期間終了後作家に返還する。

垣内委員　賞金よりも、作品の展示が大切である。

渡辺委員　プロにとっては個展を開けると最もよい。ただし、アマチュアにとっては大変。

垣内委員　登竜門として受賞した人には個展の開催と世界的なアピールを、一般の市民の受賞者には賞金を出すという考え方もある。

議　長　報告書案については、まず形式的にＡ・Ｂ事業の間で統一を図る。また、事業の組み合わせについては、提言のところで触れることも検討する。さらに、表現方法についても留意する。以上の点に注意し、原案について欠席委員も含めて意見をいただき、実施グループ長と事務局で再度整理し、作成した最終案をあらためて全員で確認する。続いて、今後のスケジュールについて事務局から説明をお願いしたい。

事務局　議題資料３は、今年度の振興会議と文化アセスメントのスケジュール案である。８月までに市長に平成２１年度文化アセスメント結果報告書の提出と市による公表を行う。９月以降は今年度の文化アセスメント対象事業の実地調査及び評価作業を行うほか、平成２３年度文化アセスメントの対象事業の選定も行っていく。今年度対象事業については、すでにアルテリッカしんゆりが開催されたが、もう１つのＫＡＷＡＳＡＫＩしんゆり映画祭について、１０月中旬に開催予定であり、事前に案内し、委員全員による実地調査を行いたい。

議　長　このスケジュールに質問がなければ、このような方向で進めたい。報告書の最終案は７月中にまとめ、７月末から８月に市長に報告できるよう段取りを組む。これをもって第２２回振興会議を閉会する。

（会議終了）